

発言



国際平和の道と安達博士

柳原 正治 放送大学教授

安達峰一郎の名前を聞かれたことがあるだろうか。国際司法裁判所の前身である常設国際司法裁判所(PCIJ)で、アジア人初の所長(1931~33年)となった人である。安達は駐ベルギー大使や駐フランス大使などを務めた職業外交官であり、国際連盟の場でも華々しい活躍をした。生誕150年にあたる本年、いくつかの企画が実施されている。一つは、去る6月15日に東京で、安達峰一郎記念財団(安達の奥様の

鏡子さんが60年に設立した財団)の主催で行われた「よみがえる安達峰一郎―世界が称賛した国際人に学ぶ」という記念シンポジウムである。200人近くの参加者を得て、安達の思想と行動が現在の混乱する国際社会にとって持つ意義について、熱心な討論が行われた。

他には、私が編纂した「世界万国の平和を期して―安達峰一郎著作選」(東京大学出版会)の刊行がある。外交官のみならず、国際法学者として、また、PCIJ所長の立場で書き記した特筆すべき口上書や報告書に加え、重要な書簡も併せて一冊にまとめた、安達初の著作集である。さらに来年8月には、国際法協会日本支部が京都で開催する国際法協会世界大会において、「アジアと国際裁判官―安達峰一郎博士生誕150周年を記念して」という、安達博士顕彰セッションが設けられる予定である。

安達が目指したのは、第一段階としての、一国全般の利益とその国の労働階級の利益との完全な調和という、社会正義に基礎を置いた国内的平和を各国において実現することである。そして次の段階として、国内的平和に加えて国家間関係においても、武力行使・戦争によらない、国際法に基づく紛争解決の可能性を追求し、正義の基礎の上に立つ、国際平和の実現をもたらすことであった。

1920年のPCIJ規程起草のための法律家諮問委員会をはじめとして、20年代の国際社会における安達の活躍は際立っていた。しかし、31年の満州事変、33年の日本の国際連盟脱退通告などのために安達は体調を崩してしまい、34年の暮れに、PCIJが置かれたオランダの地で客死した。

安達が目指した国際平和は残念ながら、今なお実現されているとはとてもいえない。むしろ、この数年国際社会において注目されるのは、既存の国際法そのものに対する「挑戦」とも呼ぶべき動きである。とりわけ、ロシア、中国、米国といった、世界の主要国の中にそうした動きがみられるという点が、深刻である。安達の真意を正確に理解した上で、国際社会の現実にも即した国際法とは何であるか、そうした国際法の拡張・改善をどのように実現できるか、そして、それぞれの国家の国益との相克の可能性を踏まえつつ、国際平和をどのようにして実現できるかという課題を探究することは、学者や外交実務家、そして政治家たちの重大な責務である。さらには、安達自身が強調したように、一般国民、なかでも若者たちに、国際法の正しい知識を広めていくという課題もまた、この上なく重要なものである。

やなぎはら・まさはる 国際法・国際法史が専門。安達峰一郎記念財団顧問。国際法学会元理事長。